



「坂本龍馬愛用の飯碗」(下関市立長府博物館 蔵)は、亀山焼ではめずらしい龍の絵柄が特徴。ガラス粉で丁寧に焼き継ぎされている。



れていた飯碗をこの目で見る事ができるなんて、龍馬を身近に感じるなあ。感心する間もなく、次のお宝が。

「印鑑付き、しかも遺言状ということ、3000万円くらいするんじゃないかなんて言われる方もいらっしゃるんですが、値段云々ではなく世界にひとつのものですから」

その言葉に、にわか歴女は自然と後ずさり。手慣れた様子でパラパラと和紙を広げている。白い手袋をするより、きれいに洗った素手の方が安全に扱えるという。こ、これが龍馬の生筆跡。「エヘンエヘン」と得意気に姉の乙女に書き送ったやんちゃなエピソードからすると、意外にも端正な印象だが、古城さん曰く「内容が内容だけに他の手紙と比べると、真面目に気持ちを入れて書かれている」

万一の時は、お龍を頼む。長府藩士の三吉慎蔵(1831-1901)宛てに残された遺言は、いろは事件の談判のため長崎へ向かう船が出る直前に書かれたもの。幕府に襲われた寺田屋事件では、自決を覚悟した慎蔵に、最期まであきらめずに生きるべきだと説得した龍馬。慎蔵を龍馬の護衛と見る説もあるようだが、

美しく掃き清められた功山寺仏殿(国宝)の前で古城さんの幕末レクチャーを受ける筆者。



での約6カ月を下関で過ごし、そのうち2カ月を、お龍とこの町で過ごしたことは意外なほど知られていない。

まずは、今回案内してくださる学芸員の古城春樹さんが勤める「下関市立長府博物館」へ。2009年8月に『龍馬とお龍の下関 ―海峡に遺した夢の跡―』を出版し、全国の龍馬ファンの注目を集める彼の祖先は鹿兒島。今や薩長の志士のごとく、講演のため全国を飛び回る日々だ。さっそく龍馬の遺品の数々を見せていただく。

古城さんの手の中にあるのは、愛用の亀山焼の飯碗。めずらしい龍の絵柄だが、線がにじんでいるため投げ捨てられていた蓋付の煮物碗を、龍馬がこりゃいと拾って継いだものと推測されている(お龍が割ったという説もある)。「ぼそぼその固い雑穀ごはんに水をかけて、蓋をしてやわらかくなったところを豪快にかきこんでいたのでしょう」という話に、食欲旺盛な龍馬の姿がうかんでくる。これは後に、長府藩士の中では一番に龍馬と知り合った印藤^{のぶる}聿(1831-1911)に餞別として贈られたもので、ご子孫が大事に保管していたらしい。実際に使わ